日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）19(2)：236, 2010.
第20回日本小児整形外科学会学術集会　主題1

思春期側弯症の診断と治療

座長：南　　昌　平

近年椎弓根スクリューの応用と相俟って，脊柱側弯症に対する後方矯正手術の治療成績が著しく向上し，思春期側弯症の診断と治療に変革がみられているため，本学会で主題として取り上げられた．

愛媛大の森野は過去10年間の学校検診の総括を行い，女子ではモアレ検査の有用性が高い一方男子は低いことを指摘した．自治医大の吉川は手術に際する術後矯正効果を予測するための，術前矯正X線を比較し，術前臥位牽引X線，臥位側屈X線より術後X線の矯正率が大きく，手術効果が高いことを指摘した．信州大の高橋は側弯症に対するナビゲーション支援手術で従来の補正操作として1椎毎にregistrationを行う手法から多椎をまとめて行う方法に変更し，精度は変わらず，手術時間の短縮でき，極めて有用であることを指摘した．獨協医大の種市は前方法の治療成績を報告し，固定範囲短縮が可能で，非固定部の下位腰椎を遺残変形の削減に効果が高いことを指摘した．聖隷佐倉市民病院の小谷は後方矯正固定手術で固定上位はフックを，下位は椎弓根スクリューを用い，頂椎凸側に椎弓根スクリューと凹側にテクミロンテープを用いるSeirei法を報告し，使用スクリューを削減し，矯正効果が高いことを指摘した．福岡こども病院の柳田は後方手術について手術時期による手術法の変遷からそれぞれの治療成績を検討し，小谷同様近年行っているhybrid法は脊椎バランスの改善，手術の安全性において優れていることを指摘した．